

高橋正岡

上

まんさくの花





高橋正圀

まんさくの花



上

検印廃止

まんさくの花・上 定価八五〇円

昭和五十六年四月一〇日 第一刷発行

著 者 高 橋 正 岡

発行者 藤 根 井 和 夫

印 刷 錦 亨 有 堂

製 本 錦 明 泉 堂

発行所 日本放送出版協会

郵便番号一五〇

東京都渋谷区宇田川町四一―一

振替東京一―四九七〇―一

(落丁本・乱丁本はお取り替えます)

まんさくの花
上

・目次

絵描きの卵 7

絹代さんの住む町 33

おっさん、ありがとう 63

ライバル登場 82

霊験カレーライス 112

無駄、無駄、無駄
146

人間模様
163

ふるさとの夏
192

快打！ 学歴ママを一掃す

214

カンボジア少年の絵
242

表紙・扉・カット

装幀

榊原 幹

土方 弘克

まんさくの花・上

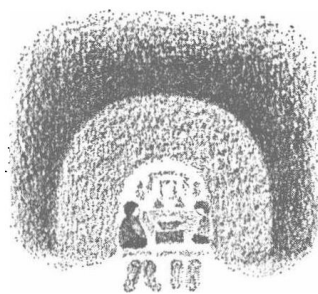
絵描きの卵

みんなで美術室にいた。一月下旬の放課後のことである。女の子って五、六人も集まると、どうしていつの間にか、わいわい、がやがや、げらげらになってしまふのだらう。

みんなとは美術クラブの仲間で、園子、寿恵、真弓、京子、弘美、それに純子もいた。京子だけが一年生で、あとは今春卒業の三年生である。

自分の紹介が後になってしまったけれど、私は中里祐子。秋田県は横手市育ちの十八歳。これでも横手城南高校ではちょっとばかり名の知られたオトメである。

いま思い出しても去年の秋に県が主催した美術展で、五十号の油絵が県知事賞を受賞したときは気持ちよかったな。新聞には載るし全校生徒がみんな尊敬のマナザシで私を見てくれたものだ。純子は高校野球にたとえて言った。



「これでうちの美術クラブのレベルが県内一と証明されたわけよ。祐子は甲子園に行ったのと同じよ」

「芸大だってちょろいよ。祐子、本気で芸大を目ざしたら」

「祐子の絵はさ、なんて言っても色彩が豊かよね。色彩感覚は持って生まれた天分だっていうから、祐子はもしかすると天才かもね」

真弓と園子もおだててくれた。もっとも美術クラブの総括的評価としては、芸術の天才は、もう少し神経質で憂愁の雰囲気あたりになだよわせ、体型もぐっと細目であらねばならぬ、なんて勝手なこと言ってくれたけど。とにかくその頃から私の胸の中には、進学するなら芸大以外にないという志望がむくむくとふくらみはじめていたことは確かだ。私は卒業したら、東京で思いきり絵の勉強がしたかった。

で、その日は親切というよりお節介の寿恵が、東京の女子画学生らしいお化粧法をコーチすると言って、ビューラーとマスカラを持ってきて、私の片目からお化粧をはじめていたのが、わいわい、がやがや、げらげらの原因だった。まつ毛をカールするビューラーははずすときの痛かったことつたらない。

「痛テテテ……」

思わずローランサンもびっくりというような声が出る。寿恵のヤツ、大切なマツ毛二本も抜いちゃうんだから、こんなコーチであるかしら。それからマスカラ。寿恵が丹念に仕上げてから手鏡を渡した。

「わ。素敵になった」

「祐子、色気でたみたい」

「色気と絵画の本質とはなんの関係もない。ただし作品の色気は別だけどね」

私は自分の気持を悟られまいと虚勢をはったがすぐにばれてしまった。

「無理しちゃってさ、片目美人。ほんととお世辞じゃなくさ、祐子の目すごくチャームिंगになったよ」

「うるさい」

私がムキになるのがおかしいらしくて、またみんながゲラゲラと笑ったとき、突然、ドアが開いたのだ。いけない、担任の斉藤先生が立っている。京子と真弓は素早い。机の上の化粧道具の前にさっと立って先生の目から隠した。私も掌でさりげなく、片目を覆う。

「なに騒いでいるんだ」

「はい、あの、実はお別れ会の、そのウ、美術クラブの演^だしものの相談を……」

しどろもどろは寿恵である。

でも先生は別に私たちを叱りに来たのではなかった。

「中里、職員室までこいや。進学のことで話がある。みんなも大概にして帰れよ」

先生は廊下に足音を残して去っていった。さあ困った。寿恵のお化粧コーチはこのときになってマスカラを拭くためのクレンジングクリームを忘れてきたことに気づいたのである。マスカラは水でも洗えるタイプがあるそうだけれど、寿恵の持ってきたのは、水泳選手のお姉さん

が去年国体に出たときに使ったもので、水では落ちないのだ。あわててティッシュでこすったら、目の周囲がダメージを受けたボクサーみたいになってしまった。

「たいへん、どうしよう。こんな顔じゃ職員室に行けないわ」

「ほんと、いい方法ないかなあ」

もう笑いごとじゃなく、みんなも心配しはじめた。こんなとき、いちばん頼りになるのが、一年生の京子である。頭の廻転が早く、私を祐子先輩といつも尊敬してくれるたのもしい妹分である。京子は「そうだ。眼帯を作りましょう、先輩」。言うより早く、もうそこにあるボール紙を切っていた。耳に渡すゴム紐も、髪を束ねるためのものを、女子学生なら大概予備を持っている。京子の作った眼帯は、鏡に映してみると、急造にしては不自然に見えない。私はボール紙の下にティッシュ・ペーパーをはさんだ。

「片目美人がタモリに早変わり」

園子が後ろで言うのを聞きながら、笑って美術室を出ただけけど、寒い廊下を歩いていくうちに、ついいままでの気持が、穴のあいた風船玉のようにしぼんでいくのを感じていた。斉藤先生がなにを言うかの大方の見当がついていたからだ。

横手の町は一年の半分近くが雪にとざされる。四方は山に囲まれ、町中を蛇行する横手川の流れは美しく、気品のある整然とした武家屋敷も残されている。だから、むしろ私はこの生まれ故郷がきらいなわけではない。でも、都会の人が考えるほど、雪はロマンチックな代物では

ない。住んでいる者にとっては、厄介きわまる生活の敵なのだ。

今日の私はことさらに雪を乱暴に蹴ちらして歩きながら、さっきの斉藤先生との会話を思い出していた。先生は言った。

「お前、志望校を東京芸術大学と書いてるな」

「はい」

「専攻は油絵か？」

「はい、そのつもりです」

「うむ。……確かにお前の才能は認めるがね。芸大では東大ほどにもむずかしいとこだかな。ちょっと高望みすぎるんでねえのか」

「簡単だとは思っておりません。でも他の人にできて私にできないことはないと思うんです」

「お前、共通一次は何点とった？」

「七百点近くでした」

先生は煙草に火を点けてから、しばらく黙っていた。それからふっと語調を変えた。

「父ちゃんはなんと言ってる？」

私は咄嗟には答えられなかった。

「言いくいんだろうが。……まだ言ってるねえのと違うか」

「はい。でも父も教育者ですから話せばわかってくれると思います」

「そうかな。実はな、おれは偶然お前の父ちゃんに会ったんだよ。『藤の木』といったかな、

一杯飲み屋で。したば父ちゃん、お前を短大にやると言ってたぞ。先生も父ちゃんがそう言ってるならその方がいいと思う」

「先生、父に私の志望校のことを話しましたか」

私はことの意外さに言葉が自然に詰問調になっていた。

「いや言わない。ただ父ちゃんの話聞いただけで、おれの意見は言わなかった」

「私、家政科にも英文科にも魅力を感じないのです。それなら芸大で討死しても」

「浪人するか」

「させてくれるかどうかはわかりません。でも、一度も受けなかったら、一生後悔するような気がします」

「わかった。お前がそれだけの決心してるならおれも止めない。とにかく父ちゃんとよく相談するんだな」

「はい。今晚、説得します。話せば父はそれほどのわからず屋だとは思いません」

私はきっぱりと自信たっぷりに言ったのだけど、本当のことを言うと、相当の難物であることは確かなのだ。

「ただいま」

玄関の戸を開けるとスー姉ちゃんが笑顔で出てきた。

「祐子、チャンス到来。今夜話すといいよ」

「どうして？」

「おっさん、上機嫌。数学の専門誌に投稿した論文が採用されたの。いま一人で読み返してご満悦」

「じゃあ、いま言おうか」

「駄目。ごはんの時がいいわよ。あたしも朋子も掩護射撃する。テキがいい気持で酔いはじめたときがチャンス」

スー姉ちゃんは、終わりのほうは声をひそめた。

ここでわが中里家のことを説明すると、まず五十七歳で中学の数学教師を、十年もやっている父・中里寛太を家長に、長女澄子二十六歳。次女が朋子で二十四歳。それに私。母は六年前に亡くなっている。だから全部で四人家族なんだけれど、私だけが養女で他の三人との血のつながりはない。なんでも父の昔の教え子の女の子が二十歳のときに親に反対された恋愛結婚をしてすぐ、夫が交通事故死、母も私を生みおとして間もなく、産後の肥立ちが悪くて死んだということだ。それを養女にしてひきとって育ててくれたのが、私の死んだ母さんと、「おっさん」こと寛太さんだ。だから、本当というと私って悲劇のヒロインなんだけれど、どういうわけか、そんな気がさっぱりしないから不思議だ。

私が小学校のときにこの生い立ちを教えてくれた母さんもおっさんも、さばさばしたもので、

「というわけだが、お前は赤ん坊のときから家の子だ。わかったな」

「うん、わかった」

それだけで終わりだった。もともと、おっさんが常連で、近くにある飲み屋「藤の木」のおふじさんの話によれば、それはおっさんも死んだ母さんも、神様みたいにいい人だから、お宅の三人娘は素直に育ったのだと教えてくれた。「藤の木」の経営者おふじさんは、父を教育者として大尊敬しているらしい。この人は未亡人である。

澄子姉さんは図書館勤め。三人の中ではいちばん頭がいいけどのんびりした性格。朋子姉さんは信用金庫のOLで、スー姉ちゃんに較べると、おシャレで派手で、ボーイフレンドもいっぱいいるような人だ。私は澄子姉ちゃんを「スー姉ちゃん」とか「姉ちゃん」と呼ぶけれど、朋子姉ちゃんは「朋ちゃん」と子どもの頃から呼んでいる。

わが家の「不思議」のなかには、なんで父親をみんなが「おっさん」と呼ぶのかもあげられる。オヤジなら一般的だけどね。

スー姉ちゃんによれば、母さんも、ずーっと「おっさん」と呼んでいて、子どもたちも自然にそうなったらしい。

「おっさんはさ、どこへ行っても『先生』って呼ばれるからね。それで母さんとの新婚時代に母さんから『おっさん』というあだ名で呼ばれたのが嬉しかったんじゃないかな」

なるほど、納得。スー姉ちゃんは、のんびり屋だけど、こういう具合に頭がいい。だからあたしは姉ちゃんを尊敬せざるを得ない。

さて、その夜のチャンス到来は、逆にとんでもないピンチを招く結果になった。四人家族が